

# 子どもと生きる哲学 への誘い

教師であることが困難な時代が続いている。学校は政争の具のような「教育改革」に翻弄され、教師たちは浅薄な教育観にもとづく評価基準と愚劣な教員管理のもとで、無意味な多忙と過度の批判に責め立てられている。

一方、現代の「貧困と格差」は子どもたちの生育にも暗い影を落とし、過密で息苦しい学校からは、学ぶ楽しさや生きる喜びが失われつつある。過酷ともいえる今日の教育現場で、本当の自分と子どもを見失い、心身を病む教師たちが増加し続けている。

逆境の時代を生きるには、自分を支える基軸が必要となる。求められる空疎な成果と価値を疑い、「教育の本質」を問い、「教育のことばとまなざし」を取り返さなければならぬ。「教育とは何か」「子どもとはどういう存在か」の〈見方〉が変わるとき、教師の苦悩は質を変える。研究的であること、知的であることで教師は再び生き直すことができるのではないだろうか。私たちはそのための〈哲学〉を探したいと願う。

過酷でありながら、教師の仕事はかけがえない魅力にも富んでいる。教師にとって、子どもと生きる日々は学びの宝庫であり、教室での子どもとの応答のなかに珠玉の教育的な知恵を見つけることができる。教師の仕事には、いつもそうした小さな〈哲学的発見〉に満ちた喜びがある。

本特集によって、あらためて教師になった原点と教師の仕事の意味を確かめ、新しい春にもう一度子どもたちと出会い直す目を養いたいと願う。